

青髭 5

明宏訊

何かわけのわからないものに自信を担保されていた。アンリは、自分が従子爵家を継承する第一の権利があると家族、主に弟たちに向かって語りかけている。ほぼ、自分では何を言っているのかわからないが、とにかく、周囲は彼の迫力に蹴倒されていく。

それらのことを自分の能力と判断で行っているというよりは、むしろ、まだ見ぬ主人の声を借りてギョームを説得しているような気がした。まさか、自分の言葉にこれほどまでの力があるなどと、とうてい信じられずにいた。自分でない誰かが自分の口を動かして、ギョームを黙らせている。

たしかに、この身体に何者かが侵入していた。最初は、不快だったのだが、時間が経過するにつれてそれが自然になってくるから不思議だ。人がなにかを食べるとき、それは異物だったものが、いざ呑みこんでしまえば身体と同化して何も感じなくなってしまう。それとほとんど変わらない。

しかし、ギョームが真に頭を垂れているのは、アンリではなくてカルッカソム伯爵なのだとおもわれる。だが、じっさいには彼も伯爵に対面したことがない。小さいころから大人たちが噂しているのを聞いて醸成してきたものかもしれないが、あくまでもイメージにすぎないし、領内に住んでいる人ならば、ほぼ同じ偶像をつくりだしている。

どうしてなのかわからないが、身元不明の貴人イコール伯爵、そして、そのとき、自の体内に宿っていたのが、彼であるという図式がいつのまにかできあがっていた。

弟は思わず負け惜しみとして思えぬ言葉を漏らした。

「兄上、私は納得したわけではありませんよ」

母親であるアデライードは、既に寝入ってしまった末の妹、口ザリーヌにひざ掛けをかけてやっていたが、ギョームの背中に手を差し出しただけで、言葉をかけることはしなかった。いや、もしかしたら、かけそこなったのかもしれない。もしくは、言葉というものを、概念から根こそぎ奪われてしまったようにみえた。

そんな母親に訊いてみた。

「母上は、髭の男性をみかけませんでしたか？」

「あなたの家来だと申していた貴人でしょ？」どうやらアンリの推測は杞憂であったようだ。たしか、魔術所の片隅にそんな術が書かれていたような気がしたのである。

視野の限界に、羊皮紙に書かれていた古代文字を入れながら母をみる。彼女は、自らの膝に口ザリーヌの頭を乗せている。長女である MARIA は、なんともいえない視線を送ってくる。その不自然さに気づいたのか、アデライードは娘に向かって口を開いた。

「MARIA、そなたは何もいませんね」

「私の言い分など……」

マリア・ド・ギョイエンヌは、優雅な身のこなしで立ち上がった。彼女は、アンリにとってみれば姉にあたる。本来ならば、従子爵位継承権は第一位にあるが、あらかじめ、それは放棄している。

アンリも、この姉を不思議な思いで見つめた。年齢からいえば、あとのきょうだいよりも少しばかり先を行っている。彼女の目つきが自分に対するだけ違う、そういう感覚をアンリは抱いてきた。

母と弟、それにほぼ一家全員の視線を集めているのにまったく動じない。もしかしたら、この姉が家を継いだ方がいいのかもしれないと、アンリは密かに思ったが、本人はおろか家族でさえ頭の片隅にすらないようだ。もっとも、この10年間、大事な時に家にいなかったせいで居場所がないのは当たりまえのことだ。

誰もがこの姉に対して一目を置いているのはたしかだ。それゆえに、沈黙が続いている。「何を話し合う必要があるのですか？アンリが継承する、ただ、それを追認するだけでしょう？」

「本当にそれをお認めなのですか？」

さすがに、まともに自分の顔をみないでよくもそのようなことが言えますね、とは成人を迎えた人間としてはとうてい投げつけられる言葉ではなかった。

「私にそういわせる理由がおありなのかしら？」

横顔が本当に美しい人は少ないと、血縁者ながら感心しながらも、アンリは言葉を探した。しかし、機先を制されたのは弟の方だった。

「父上は、確かにあなたを後継者と認めた。それ以上の事実が必要だとでも？」

「あ、姉上?!」

マリアも父親の言葉を聞いていたとは、あの声の宛先はアンリと彼女、二人にむけて発せられたものだったということか。一家の長女の言葉にルイもギョームも色を失った。異口同音に同じ言葉が発せられた。

「それは本当ですか？姉上!？」

「アンリ、どうしてあなたはそのことを主張なさらないのか？」

母であるアデライードが口を挟んだ。

「それは本当なのですか？」

「本当です、母上」

すでに寝入っている末の妹を除いて、みながどよめく。マリアが無反応なのは言うまでもない。

家族の中で、母と姉だけが共有する秘密があるようにアンリは思えてならなかった。その正体はようとしれないが、この二人の周囲だけ醸し出されている空気が違う。母親の冷静すぎる態度から、彼女もあらかじめ父親の発言について知っていたということもありえるのではないか。あるいは、直接に話を聞いていたということもありえよう。

単純なルイは考えが簡単に顔に出るから、知らないことはほぼまちがいない。ギョームは、な

かなか内面を見せないが、女性二人とは一線を画している。何も知らされていないとみるべきだろう。

青い血の持ち主には、紙の契約などたいした意味を持たない。それよりも言葉による誓の方がはるかに効力を持ち得るのだ。証言者が手を挙げたことは、ルイとギョームを完全に黙らせる事由となった。

いや、二人にとってみれば、あくまでも……そうせざるをえない……といったところであろう。一家の嫡男が奔走してから、いったい、領地で何が起こったのか、家族たちは黙して語らぬゆえに、知りようがないが、二人の頑なな態度から容易に押し量れる。

母親に起こされたものの眠そうな末の妹を除いて、家族たちはそれぞれの思いを内に秘めているようだった。とにかく、無言のうちにアンリがギョイエン又従子爵家を相続することにみなが同意したのである。